

大腿骨内顆軟骨損傷に対し骨軟骨柱移植術を行い試合復帰し得た プロ野球選手の1例

○荒木 大輔, 黒田 良祐, 久保 晴司, 松下 雄,
木下 恵祐, 黒坂 昌弘

神戸大学大学院 医学研究科 外科系講座 整形外科

【緒言】

骨軟骨移植術は限局した関節軟骨損傷に対し効果的な治療法であるとされる。今回我々は内側半月板切除術後に大腿骨内顆軟骨損傷を来し、骨軟骨移植術を施行、現場復帰し得た1例を経験したので報告する。

【症例】

41歳男性。プロ野球選手。38歳時、左膝内側半月板損傷の診断にて鏡視下内側半月板部分切除術施行。39歳時、ベースランニング時に左膝関節痛及びpop音を自覚。画像所見上大腿骨内顆荷重部に広範な骨挫傷を認め安静加療の後に野球復帰。しかし、バッティング練習を契機に左膝関節痛・水腫を繰り返すようになった。左膝関節鏡視下手術にて内顆関節軟骨面に広範な軟骨損傷を認め、debridementのみ施行されるも左膝関節水腫持続。徐々に左膝関節痛・腫脹増強しADL制限出現するため、当科受診。画像所見上 $\phi 31 \times 17\text{mm}$ の大腿骨内顆軟骨欠損を認め、同部に対し骨軟骨柱移植術を施行した。また、周囲軟骨の変性もあり、変形性関節症の病態であった。術後1週より可動域訓練開始、術後6週より部分荷重開始、術後9週にて全荷重を獲得した。術後4ヶ月よりwalking開始、術後6ヶ月よりrunningを開始、術後10ヶ月にて2軍戦復帰、術後13ヶ月にて1軍戦復帰を果たした。しかし経過中疼痛の消失することはなかった。

【結果】

プロアスリートの膝関節軟骨損傷に対し骨軟骨柱移植術を施行し、試合復帰が可能であった。限局した大腿骨内顆軟骨損傷に対し骨軟骨柱移植術は有効な治療法とされているが、プロアスリートで既に関節症性変化を来していた本症例は、骨軟骨柱移植術が最良の治療方法であったか課題を残した。